

**\*表紙写真によせて\*****バラコットで出会ったロバ**

サクサクサクサク…どこからともなく、心地良いリズムを刻む足音。枯れ木を運ぶロバと農民が連れ立ってやってきた。悪路に強い彼らと人間との共生の歴史は古い。一説には5,000年前から家畜として人間に使役されてきたそうだ。

ロバの視点で滑稽な人間世界を眺めた、とあるポーランド映画を鑑賞した。動物虐待のそしりを受けて、解散させられたサーカス団。主人公のロバは保護先の牧場から逃げ出したり、悪い人に捕まったりを繰り返して行く先々を転々とする。作中では一切物言わず、愚かな人間の業の深さを見つめ続ける。

このロバ達も同じであったらどうか。幾多の爆撃や戦闘を生き延びたロバもいれば、死んでしまったロバもいて、彼らにどちらかを選ぶ術はなかった。ただ人の世の流れに己の命運を委ねて、幸運にも今日まで生きてこられた彼らは、眼前の光景を見て何を思うだろう。

愚鈍の代名詞としてけなされがちな彼らだが、ゆっくり一步ずつでも、前を見て進み続けられるのはえらいと思う。頑固な一面もあり、へそを曲げると一步も動かなくなるというけれど、それくらいの頑固さも時には必要かもしれない。ロバのような生き方に少し憧れたりもする。